



鳥取県の県土の7.4%を占める森林が、いよいよ伐期（収穫期）を迎えている。質の高い木材が育っており、この良質な木材を山から切り出していかに使っていくか、が課題だ。

「今、山が動き出した」と言われるが、合板やチップが主体で住宅等の木材利用はまだ現在の現状だ。太くて質の良い材が山に残されている。

県産材の利用拡大には、木材も農産物と同じように地産地消の雰囲気や定着させることが必要だ。森林には温暖化防止や山地災害防止などの機能があるが、手入れされていなくて増えている。住民が地元で木材を使うことで、山の仕事が増え、若い担い手が育成され、森林の手入れが進むことをあらためて県民に知ってほしい。

関係者は鳥取県の木の良さをPRするとともに、まとまった量の県産材をストックする仕組みの構築など、使ってもらいやすい環境づくりに努力したい。

県産材の利用拡大には、県民の皆さんの理解が欠かせない。工務店等のニーズに応えるよう品質の向上や円滑な供給に努め、上流（林業者）から中流（加工・製材、建築業者）、下流（消費者）まで県民一丸となって県産材を利用するムードを高めたい。



森林が全面積の約74%を占める鳥取県で、「木づくいの国」としての実現に向けた取り組みが始まっている。県産材の利用拡大が狙い。県産材利用の減少が続けば、林業従事者が不足し、豊かな資源を持つ山林の荒廃にもつながる。関係者らの危機感が増しており、一般県民を巻き込んだ県産材の利用拡大への意識醸成が課題となっている。

県産材活用へ本腰

減少食い止め産業と山守れ

膨大な資源

「一言で言うとうと、優しくて、強い」。県林業試験場長の大西良幸さんは木材の魅力についてこう説明する。「優しい」はコンクリートや金属製の物と比較して、触れたときに感じる温かさや衝撃の少なさ、健康への良さなど、さまざまな面で認識できる。人の生理面や心理面でも良い影響があるという。また、木材は同じ重量の鉄と比較し、圧縮や引っ張りの強さで上回る。

木造率は上昇

「木づくいの国」としては平井伸治県知事が掲げた公約の一つ。県産材がブランドとして全国で販売・情報発信され、県民全体で県

産材を利用する機運にあらわれた地域になることを思い描く。県産材の利用を進めることで、雇用の増加や山林所有者への還元を通じて地域の活性化が期待される。

県内では、全着工戸数のうち木造住宅が占める割合を表す木造率は上昇しており、2013年は83%と全国平均の56%を大幅に上回っている。ただ、県産材は利用が伸びていない。県産材・林産振興課は「合

利用は進んでいるが、木造住宅などの建築物への利用は拡大の余地がある」と分析している。

県産へのこだわり

県産材の利用が進まない要因の一つに、製材品生産における供給側と需要側のミスマッチが指摘されている。質や量の安定確保も問題で、規模が小さい県内の事業者は安定して良質な材をそろえることができず、安く大量に確保できる県

板用やバイオマス発電用の

外産が利用されてしまう。

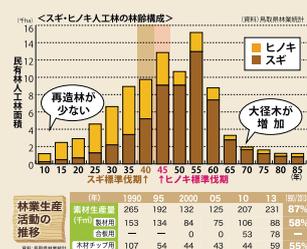


鳥取県の林業・木材産業の現状と課題

◆県土の4分の3は林野◆

総土地面積に対する林野面積の割合を示す林野率が7.4%で、林野面積は県土全体の4分の3を占めている。全国13位。

◆蓄積分の3分の2が未利用◆



民有林の人工林率は54%で、その5割をスギ、3割をヒノキ、2割をマツで構成。人工林の約6割が建築用材として利用可能な林齢を迎えており、毎年約70万立方メートルの蓄積があるが、利用（素材生産量）はその約3分の1にとどまっている。

◆製材出荷量はピーク時の8%◆

製材の出荷量は減少を続けており、2013年は3万3千立方メートルで、ピークだった40年前（41万7千立方メートル）に対して8%まで落ち込んでいる。また、製材工場も13年は1990年の約3割に減っている。



◆県産材利用の補助制度を充実◆

県などは、展示効果やシンボル性が高い公共施設の木造化・内装木質化を支援。2009年度から14年度までの6年間で幼稚園や公民館など65棟の木造化、内装木質化が図られた。

◆乾燥材の安定供給の取り組み◆

木造住宅や木造公共施設の建築資材として需要が高まっている県産乾燥材について、ハード面（乾燥機の導入支援）とソフト面（乾燥日本農林規格＝JAS＝工場の認定取得の支援）の両面から、安定供給体制の整備に取り組んでおり、乾燥JAS認定工場は06年のゼロから14年には10に増加した。

【新設住宅着工戸数の推移】

	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2013年	
鳥取県	総戸数(戸)	6,068	5,626	5,115	4,168	2,140	2,435
	木造	2,899	2,999	2,349	2,225	1,665	2,020
	非木造	3,169	2,627	2,766	1,943	475	415
	木造率	48%	53%	46%	53%	78%	83%
全国	総戸数(戸)	1,707,109	1,470,330	1,229,843	1,236,175	813,126	980,025
	木造	727,765	666,124	555,814	542,848	460,134	549,971
	非木造	979,344	804,206	674,029	693,327	352,992	430,054
	木造率	43%	45%	45%	44%	57%	56%

(鳥取県林業統計参照)

これらの問題を解決しようとして、2015年5月、生産から加工、建築、設計など「川上から川下」までの林業関係団体の代表者らは、県産材利用拡大に向け

に掛けて木を育てている生産者から、加工製材業者、建設業者、そして末端の利用者まで全ての県民に、県産材に関心を持ってほしい」と話した。

で組織を立ち上げることを決めた。高く売りたい生産側と安く買いたい利用側（建築、加工）が一緒に出席する会合は近年にはなかったことだ。

出席した県木材協同組合連合会の前田八壽彦代表理事会長は「木材の地産地消のイズムが低い。木材は県産にこだわる人が少なく、価格で選ばれる。智頭や若桜などの山で手塩

「川下」まで

かせない。木を植え、育て、加工、製材、建築など、県内林業に対する思いや取り組みを紹介する。



先代から次代 継ぐ責任

大谷訓大さん(33)は自分の持ち山を手入れし、木の伐採、搬出、出荷まで自力で行う自伐林家。智頭町では山の番頭さんを意味する「山番」と呼ばれる。「先代から受け継いできた山が自分の役割」と大谷さんは力を込める。

智頭町那岐地区の自伐林家 大谷訓大さん

「きたい」とウターンした大谷さん。先祖代々伝わる持ち山の再興に乗り出した。古くからの考え方を大切にしながら積極的に新たな知識を吸収している。

「林業仲間づくりに力を入れる大谷さんは、「自伐型林業塾」の開講も計画する。「林業の知識や技術はもろろん、山を大切に暮らすマインドの部分もしっかり伝えたい」と将来を見据える。

な知識を吸収している。こだわりの持つ作業道造りでは、自然の地形を生かしながら低コストで崩れにくい「鳥取式作業道」の方式で道を開く。自然環境にダメージを与えるセメントを使わず、成木の切り出し方法にも配慮を欠かさない。



地元の木が 一番いい

子どものころから山や木に囲まれたところで過ごすことに幸せを感じてきた遠藤祐子さん(27)。山奥での作業も周りに木がいっぱい生えていて環境の中にいることができてうれしい」と楽しんでいる。

同組合では間伐を主な業務とする林産班に所属。鳥取大



鳥取日野森林組合、大山町出身 遠藤祐子さん

「林業は今生きている人にも100年後の人にも関わっている仕事。みんなに喜んでもらえる仕事をしたい」と、頭の隅に置いている」と照れながら語った上で、「日野の木が一番いい。住宅に使えば家で森林浴ができますよ」とPRした。

体験し感激、Iターン



鳥取県東部森林組合、兵庫県たつの市出身 伊藤綾沙子さん

「うーん」と林業機械の音が響く鳥取市長柄の山林。鳥取県東部森林組合にIターン就職した伊藤綾沙子さん(31)が男性に交じって間伐材の搬出作業に汗を流す。

2年前までは、営業や事務を担当するOL。転職を

考えていた際、同組合が企画した2泊3日の無料林業体験に参加して植林作業に感激。2014年4月にこの世界に飛び込んだ。

同組合では、現場で働く唯一の女性だが、男ばかりの職場で働くことへの違和感はない。真剣に取り組めば取り組むほど山仕事の危険性や難しさが分かってきた。特に難しい作業は、切る木と残す木を判断する



久大建材社長 霜村芳照さん

品質向上に 木材乾燥機導入

鳥取市叶の久本木材は2014年3月、約2千万円をかけて木材の乾燥機を導入した。かつては建築しながら木材を乾燥させていた時代があったが、今は事前に乾燥した製品が必須になりつつある。

グループ企業の久大建材社長、霜村芳照さん(72)は「県内の建築業者のためにも必要な施設。乾燥させないと、美しい智頭や若桜の木の良い引き出せないし、光沢がでない」と説明する。

木材の強度を確保し、ひずみやカビの発生などを防ぐ乾燥材のニーズは全国的に高まっている。県内では、寸法や等級区分、含水率など

の基準を設けた日本農林規格(JAS)材を製造できる工場が増加。県産材を活用した木造住宅の建設や改修に対する県の助成の中で、含水率が20%以下の県産JAS材の使用に上乘せ助成している。

同社では、乾燥機の利用により約2週間で木材の含水率を18%にすることができ、お客さんにスムーズに木材を届けられるようになった。一方で、乾燥材の利用拡大にはコスト増への消費者理解をどう進めていくかが鍵になる。

霜村さんは「県内だけで伐期を迎えた県内の木を消費するのは難しい。販路開拓に向けて製材所、林業関係者が一枚岩になって取り組みたい」と話す。

山陰屈指の 加工技術と 最新設備

大工など職人が減る中、木造住宅の柱や梁(はり)の仕口、ほぞなどを事前に作製するプレカットは機械化が進み、住宅建材の約9割を占めている。その分野で山陰屈指の加工技術を誇るのが大山プレカット協業組合(大山町庄田)だ。

同組合は1994年、県西部の木材業者を中心に設立された。現在はプレカット加工をはじめ、木材の人工乾燥機や木材の強度を測る機械を導入し、安心して使ってもらえる木材の供給も行っている。

工場では登り梁などの斜め材などの機械加工が可能で、金物工法にも対応。独自の技術が評価され、2014年には14・7メートル以上柱がない構造で強度が求められる鳥取県産業技術センター食品開発研究所(境港市)の建築材として採用された。

手仕事では数時間かかる作業もわずかな時間で済むが、製品の納期は短縮できるが、一本一本の異なる木材の癖や見栄えを考え、どんな加工をするかを判断するのは、人の知識や経験が問われる部分。技術向上への努力も欠かせない。



大山プレカット協業組合

同組合専務理事の吉岡総一郎さん(54)は「お客さんの顔を思い浮かべながら恥ずかしくない製品を出せるように心掛けています。技術、価格などトータルでよその業者には負けない」と力を込める。

いいな、木造住宅の生活



触れてわかる温かさ、やさしさ

建てた業者が音田工務店だったことを調べて参加した。辻本さんは「木の家が大好き。日本の固有種の杉を使った家を建てたい」と話した。

住宅内部には、県産の杉を使った梁や床、天井など木の部分が目立つ。完成後も梁は常に目にすることができ、木に囲まれた生活を実感できる。

新築住宅で家族4人での生活を始める施主(31)は「子どものころから日本の古い建物や寺が好きで、完成見学会を見て回り、木が見える家に住みたいと思っていた。妻も大歓迎している」と、夢の実現に幸せを感じていた。

鳥取県産木材を活用した住宅の魅力として挙げられるのが、木の「温かさ」や「やさしさ」。新築工事の現場見学会やフェアに参加した人たちが木材に触れて感じた、木造住宅の良さを紹介する。

「木材がふんだんに使われていて落ち着くなあー」「肌触りが柔らかい」「いつかは住んでみたい」。境港市元町で開かれた木造住宅の構造見学会で、参加者から感嘆の声が次々に上がった。

会場は1週前に棟上げ式

が終わったばかりの木造2階建ての住宅で、木材のほぼ8割は県産材。見学会を開いた音田工務店(米子市、音田猛社長)の社員は「杉は柔らかいから子どもが走り回ってこけても大きなけがはしない。子育て家庭にはもってこい」と説明した。

広島市から訪れた会社員、辻本篤郎さん(58)は、広告の背景に写っていた家に「一目ぼれ」し、



県産材「PR隊」 「ケンサン」登場

宝の山からの贈り物だ

鳥取県産材の需要拡大を目指し、鳥取の木を愛する「ケンサン」が2015年秋に登場した。メンバーは県内の林業者や建築業者ら12人。森林整備やそれぞれの仕事を通じて県産材の魅力を伝えている。

鳥取県木材協同組合連合会(前田八壽彦会長)が生活にもっと県産材を取り入れてもらおうと企画。木材を切り出す人、販売する人、製材・加工する人、使って家を建てる人など、県産材のことならお任せという人たちを選んだ。



ケンサンのデビューの場となったのは2015年9月19日に米子市東福原8丁目の米子産業体育館で開かれた「木の住まいフェア」。北栄町西園の小椋設計事務所の小椋真美江さんは「鳥取県の山は多くの森林資源がある『宝の山』。切り出された木の家は心を落ち着かせ、目を休ませる」と来場者に県産材の利用を呼び掛けていた。

ケンサンの問い合わせは電話0857(30)5490。

日本海新聞読者アンケート集計

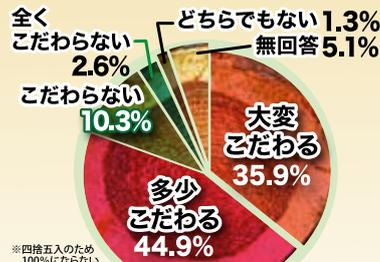
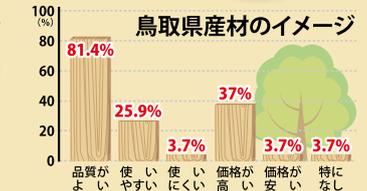
住宅への利用「こだわる」 81%

県産材への関心高く

日本海新聞が「木づかいの国とっとりへ」の紙面で読者を対象に行ったアンケートでは、住宅に木材を使う場合に鳥取県産材を利用することについて、「大変こだわる」「多少こだわる」と答えた人が合わせて約81%に上り、県産材利用に高い関心があることが分かった。

また、住宅への木材の利用についての質問では「ぜひ使いたい」が全体の3分の2を超えた。さらに住宅を含めた製品などへの県産材の利用についても「ぜひ使いたい」が約47%あった。

ただ、県産材のイメージについて「品質が良い」と答えた人が8割を超えたものの、価格が「高い」と答えた人は約37%あり、県産材の価格が高いとの意識が、県産材利用拡大の障害となっていると考えられる。



アンケートは、①回目=6月30日~7月31日(質問は6月30日掲載)、②回目=7月31日~8月31日(同7月31日掲載)、③回目=8月31日~9月20日(同8月31日掲載)に実施。①は27人、②は38人、③は78人の回答があった。